

内視鏡と腹腔鏡の合同手術を行った十二指腸憩室による閉塞性黄疸の一例

サシーム パウデル¹、 横山 和彦¹、 千葉 大樹²、 吉田 秀明¹

¹余市協会病院外科

²余市協会病院内科

症例：86歳男性

現病歴：嘔吐、発熱、悪寒にて当院外来受診。採血で閉塞性黄疸疑う所見で、PTGBD 施行し、入院。その後の精査で胆石症と膵頭部腫瘍認めた。精査及び治療目的で ERCP 試みたが、乳頭部付近に巨大な憩室を認め ERCP 困難で施行出来なかった。精査の Dynamic CT などで膵頭部の腫瘍は良性と診断したが、膵頭部の腫瘍及び憩室による総胆管の圧迫により閉塞性黄疸来たとしている判断。胆石症及び閉塞性黄疸の治療目的に腹腔鏡下胆嚢摘出術施行。術中に胆管から Guide Wire 挿入し、術中内視鏡で Guide Wire つかみ、それに沿わせることでステント挿入が可能であった。

結語：乳頭周囲の十二指腸憩室により ERCP が困難である症例が多く、また合併症の率も高くなる報告がある。腹腔鏡と内視鏡を併用することで、低侵襲かつ簡易に ERCP 行う事が出来た。若干の文献考察を加えて報告する。